

## 翻刻『源氏拔書』(下)

—— 柏木と夢浮橋 ——

田 坂 憲 二

かしは木

いとうくも侍るかなと聞ゆるに、いみしうわなゝけは、思ふ事もみなかきさして(九八才)

柏木

今はとてもえんけふりもむすほゝれたえぬおもひのなをやのこらん

心くるしうきゝなからいかてかは、たゝをしはかり、残らんとあるは

女三宮

たちそひてきえやしなましうき事をおもひみたるゝけふりくらへに

ことの葉のつゝきもなくあやしき鳥のあとのやうにて

柏木

ゆくゑなき空のけふりと成ぬともおもふあたりをたちははなれし

あな心うとおとろかしきこえ給へは、かほうちあかめてお

はす

源氏

たかよにかたねをまきしと人とはゝ(九八ウ)いかゝいはねの松はこたへん

ことしはかりはとうちおほゆるもいまゝしきすちなりければ、あひみん事はとくちすさひて

夕霧

時しあれはかはらぬ色ににほひけりかたえかれにしやとのさくらも

わさとならすすしなしてたち給ふに、いととう

一条御息所

このはるはやなきのめにそ玉はぬくさきちる花のゆくゑしらねは

花のちりたるこすゑともをもけふそめとゝめ給ふ、このたゝうかみに

敦仁

木のしたのしづくにぬれてさかさまに(九九才)か

すみのころもきたる春かな

大將君

タきり  
なき人もおもはさりけんうちすてゝ夕へのかすみ君き  
たれとは

弁のきみ

右大弁  
うらめしやかすみのもたれきよとはるよりさきに

花のちりけん

いかなる契りにかすゑあへるたのもしさよなどのたまひて、  
しのひやかにさしよりて

夕霧  
ことならはならしの枝にならさん（九九ウ）「葉も

りの神のゆるしありきと

この御あひしらへきこゆる少將の君といふ人して

一条御息所  
かしは木に葉もりの神はまさすとも人ならすへき宿の  
こすゑか

よこふえ

春の野山かすみもとくしければ、心さしふかくほりい  
てさせて侍るしはかりなん

朱雀  
世をわかれ入なん道はをくるともおなしところを君も

たつねよ

御きちやうのそはよりほのみゆるをとりて見給へは、御て

（一〇〇オ）はいとはかなけにて

女三

うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山ちにおもひ

こそいれ

御はのおひ出るにくひあてんとて、たかうなをつとにきり  
もちてしつくもよとくひぬらしたまへは、いとねちけた  
るいろこのみかなとて

源氏

うきふしもわすれすなからくれ竹のこはすてかたき物  
にそ有ける

宮はたゝ物をのみあはれとおほしつゝけたるに

タきり

ことにいてゝいはぬもいふにまさるとは（一〇〇ウ）

人にはちたるけしきをそみる

と聞え給ふに、たゝすゑつかたをいさゝかひきたまふ

落葉

ふかき夜のあはれはかりはきゝわけとことよりほかに

ハイ

えやはいひける

むかしを忍ふひとりことをはさてもつみゆるされはへりけ

り、これはまはゆくなん、とていてたまふに

落葉

露しけきむくらの宿にいにしへの秋にかはらぬむしの

こゑかな

ときこえいたしたまへり

タ

よこふえのしらへはことにかはらぬを（一〇一オ）

むなしくなりしねこそつきせね

夢のうちにも、なき人のわつらはしうこのうゑをたつねて  
きたるとおもふに

夢中 柏木

ふえ竹にふきよる風のことならは末の世なかきねをつ  
たへなん

すゝむし

花の中のやとりへたてなくとおもほせとてうちなき給ぬ  
源氏はちす葉をおなしうてなとちきりをきて露のわかるゝ  
けふそかなしき

と御すゝりにさしぬらしてかうそめなる御あふきにかき  
(一〇一ウ) つけたまへる、宮

女三へたてなくはちすの宿をちきりても君か心やすましと  
すらん

すゝむしは心やすく今めいたるこそらうたけれなどの給へ  
は、宮

女三宮大かたの秋をはうしとしりにしをふりすてかたきすゝ  
むしのこゑ

と忍やかにの給ふ、いとあてになまめいておほとかなり、  
いかにとかやいておもひの外なる御事にこそとて

源氏こゝろもて草のやとりをいとへともなをすゝむしのこ  
ゑそふりせぬ(一〇二オ)

大将などは六条院にさふらひ給ふときこしめしてなりけり  
冷泉院雲のうへをかけはなれたるすみかにももの忘れせぬ秋  
の夜の月

おさ／＼なきをほいなきことにおほしあまりておとろかさ  
せ給へるかたしけなしとて、にはかなるやうなれと参り給  
んとす

源氏月かけはおなし雲井にみえなからわかやとからの秋そ  
かはれる

夕きり

まかてんかたもみえすなりゆくはいかゝすへきとかこちて  
夕霧山さとのあはれをそふる夕きりに(一〇二ウ)たち  
いてん空もなき心ちして

ときこえ給へは

落葉宮山かつのまかきをこめてたつきりもこゝろそらなる人  
はとゝめす

いかやうにおもひなすへきにかはあらんと、いとほのかに  
あはれけにないたまふて

落葉宮我のみやうきよをしれるためしにてぬれゆふ袖のなを  
くたすへき

いかにいひつる事とおほさるゝに、けにあしうきこえつ  
かしなとほゝゑみたまへるけしきにて(一〇三オ)

夕霧おほかたはわれぬれきぬをきせすともくちにし袖のな  
やはかくるゝ

たか御ためにもあらはなるましきほとのかきりにたちかくれ

ていてたまふ御こゝちそらなり

<sup>夕霧</sup> おきはらやのきはの露にそをちつゝやへたつきりをわけて行へき

心のはんにたにくちきようこたへむとおほせはいみしうもてはなれ給、こしらへに

わけゆかんくさはの露をかことにてなをぬれきぬをか  
けんとやおもふ（一〇三ウ）

さるはにくけもなくいとこゝろふかけにかいたまへり

<sup>夕霧</sup> たましひをつれなき袖にとゝめをきてわかこゝろから  
まとはるゝかな

中く心やすくひたふるこゝろもつき侍りぬへけれ

<sup>夕霧</sup> せくからにあさくそ見えんやまかはのなかれてのなを  
つゝみはてすは

いとはれくしからぬさまにものし給ふめれば、見たまひ  
わつらひてなん

<sup>一条御息所</sup> をみなへししほるゝのへをいつことてひと夜はかりの  
やとをかりけん（一〇四オ）

いとめつらしき御ふみをかたくうれしうみたまふるに、  
この御とかめをなん、いかにきこしめしひかめたることにか  
<sup>夕霧</sup> 秋の野のくさのしけみはわけしかとかりねのまくらむ  
すひやはせし

わか君してたてまつれたまへる、はかなきかみのはしに

<sup>雲井属</sup> あはれともいかにしりてかなくさめんあるやこひしき  
なきやかなしき

さきくもかく思よりてのたまふにけなのなきかよそへや  
とおほす、いとくことなしひに

<sup>夕霧</sup> いつれとかわきてなかめんきえかへる（一〇四ウ）  
露もくさはのうへと見ぬよを

うちなきつゝゐたり、しかのいといたなくをわれおとら  
めやとて

<sup>夕霧</sup> さとゝほみをのゝしのはらわけてきて我もしかこそこ  
ゑもおしまね

とのたまへは

<sup>少将君</sup> ふちころもつゆけき秋のやま人もしかのなくねにねを  
そそへつる

大納言こゝにてあそひなとしたまひしおりくを思出給ふ  
<sup>夕霧</sup> 見し人のかけすみいてぬいけの水にひとりやとる秋

のよの月（一〇五オ）

ふてうちをきてうそふきたまふ、しのひたまへともりてきゝ  
つけゝる

<sup>夕霧</sup> いつとかはおとろかすへきあきの夜のゆめさめてとか  
いひしひとこと

そこはかとかきたまへるを見つゝけたまへれば  
<sup>落葉</sup> あさゆふになくねをたつるをの山はたえぬなみたやを

となしのたき

しくれいとあはたゝしうふきまよひ、よろつに物かなしければ

落葉宮

のほりにしみねのけふりに立ましりおもはぬかたになひかすもかな（一〇五ウ）

御はかくにそへてきやうはこそをさきにたてたるか、御かたはらはなれねは

落葉宮

こひしさのなくさめかたきかたみにてなみたにくもるたまのはこかな

ひたおもてなへければいて給とて、たゝいさゝかのひまをたにといみしうきこえたまへと、いとつれなし

夕霧

うらみわひむねあきかたき冬のよに又さしまさるせきのいはとよ

ぬきとめたまへるひとへのそてひきよせ給て

雲井

なるゝ身をうらみんよりはまつしまの（一〇六オ）あまのころもにたちやかへまし

猶うつし人にてはえすくすましかりけりとひとりことのにたまふを、たちとまりてさも心よき御こゝろかな

夕霧

まつしまのあまのぬれきぬなれぬとてぬきかへつてふなをたゝめやは

さてかの宮に蔵人の少将を御つかひにてたてまつれ給ふ

致仕

ちきりあれや君を心にとゝめをきてあはれとおもふう

らめしときく

なみた水くきにさきたつ心ちしてかきやりたまはす

落葉宮

なにゆへかよにかすならぬ身ひとつを（一〇六ウ）うしとおもひかなしともきく

かくあなつりにくき事もいてきにけるをとおもひて、ふみなとはとき／＼たてまつれはきこえたり

藤内侍

かすならはみにしられましよのうきを人のためにもぬらすそてかな

ものゝあはれなるほとつれ／＼に、かれもいとたゝにはおもはしとおほすかたこゝろそつきにける

雲井

人のよのうきをあはれと見しかともみにかへんとはおもはさりしを

みのり（一〇七オ）

あかしの御かたに三の宮してきこえたまへる

紫上

おしからぬこの身なからもかきりとてたきゝつきなことのかなしさ

御かへり心ほそきすちはのちのきこえもこゝろをくれたるわさにや、そこはかとなくそあめる

明石上

たきゝこるおもひはけふをはしめにてこのよにねかふのりそはるけき

ことはてゝをのかしゝかへり給なんとするもとをきわかれ

めきておしまる、花ちる里の御かたに

<sup>紫上</sup>たえぬへきみのりなからそたのまるゝ(一〇七ウ)」

よゝにとむすふ中のちきりを

御返り

<sup>花散里</sup>むすひをくちきりはたえし大かたののこりすくなきみ

のりなりとも

心くるしくつゐにいかゝおほしさはかんとおもふにあはれ

なれは

<sup>紫上</sup>をくと見るほとそはかなきともすれは風にみたるゝ萩

のうは露

けにそおれかへりとまるへうもあらぬよそへられたる、お

りさへしのひかたきを

<sup>源</sup>やゝもせはきえをあらそふ露のよにをくれさきたつほ

とへすもかな(一〇八オ)」

とて御なみたをはらひあへたまはす、宮

<sup>明石中宮</sup>秋風にしはしとまらぬ露のよをたれか草葉のうへとの

みみん

あみた仏くゝとひき給ふすゝのかすにまきはしてそ、な

みたの玉をはもてけち給ける

<sup>夕霧</sup>いにしへの秋の夕のこひしきに今はときえしあけくれ

の夢

あはれなる事共こまやかにきこえ給て、はしに

<sup>致仕</sup>

いにしへの秋さへ今のこゝちしてぬれにし袖に露そを

きそふ(一〇八ウ)」

その秋の事恋しうかきあつめ、こほるゝなみたをはらひも

あへたまはぬまきれに、御かへし

<sup>源氏</sup>露けさはむかしいまともおもほえすおほかた秋の世こ

そつられ

冷泉院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこたえす、

つきせぬことゝもきこえたまひて

<sup>秋好</sup>かれはつる野へをうしとやなき人の秋に心をとゝめさ

りけん

なみたのこほるゝを袖のいとまなくかきやり給はす

<sup>源</sup>のほりにし雲井なからもかへり見よ(一〇九オ)」わ

れ秋はてぬつねならぬよに

まほろし

兵部卿の宮わたり給へるにそ、たゝうちとけたるかたにて

たいめんし給はんとて、御せうそこきこえたまふ

わかやとははなもてはやす人もなしなにゝか春のたつ

ねきつらん

みやうちなみたくみ給て

かをとめてきつるかひなくおほかたのはなのたよりと

いひやなすへき

御かたはらのさひしきもいふかたなくかなし（一一〇九ウ）  
うき世にはゆききえなんとおもひつゝおもひのほかに  
なをそほとふる

うくひすのはなやかになきいてたれはたちいてゝ御らんす  
源  
うへて見しはなのあるしもなきやとにしらすかほにて  
（ママ）  
きぬるうくひす

御しつらひなともいとおろそかにことそきて、さひしく物  
心ほそけにしめやかなれは

いまはとてあらしやはてんなき人の心とめにし春のか  
きねを

ひるのおましにいとかりそめによりふし給、つとめて御文  
奉り給に

源  
なくくもかへりにしかなかりの世は（一一〇オ）  
いっこもつゐのとこよならぬに

よへの御ありさまはうらめしけなりしかと、いとかくあら  
ぬさまにおほしほたれたる御けしきの心くるしさに、身の  
うへはさしをかれて涙くまれ給

明石上  
かりかゐしなはしろ水のたえしよりうつりし花のかけ  
をたにみす

夏の御かたより御ころもかへの御さうそくたてまつり給と  
て

花ちる里  
夏ころもたちかへてけるけふはかりふかきおもひもすゝ

みやはせぬ

御かへり

はころものうすきにかはるけふよりはうつせみのよそ  
いとゝかなしき（一一〇ウ）

あふひをかたはらにおきたりけるをよりてとり給て、いか  
にそやこのなこそわすれにけれとの給へは

中将君  
さもこそはよるへの水にみ草めめけふのかさしよなさ  
へわするゝ

とはちらひてきこゆ、けにといとをしくて

源  
おほかたはおもひすてゝしよなれともあふひはなをや  
つみおかすへき

またれつるほとゝきすのほのかにうちなきたるも、いかに  
しりてかときく人たゝならず

源  
なき人をしのふるよひのむらさめに（一一一オ）ぬ  
れてやきつるやまほとゝきす

とていとゝそらをなめ給、大將

夕霧  
ほとゝきすきみにつてなんふる里のはなたちはなはい  
まそさかりと

日くらしのこゑはなやかなるに、御まへのなてしこの夕は  
へをひとりのみ見給へは、けにそかひなかりける

源  
つれくゝとわかなきくらす夏の日をかことかましきむ  
しのことゑかな

はたるのいとおほうとひかふも、せきてんにはたるとんて  
とれいのふることもかゝるすちにのみくちなれたまへり

(一一一ウ)

源

よるをしるはたるをみてもかなしきはときそともなき

おもひ成けり

せんさいの露いとしけくわたとのゝとよりとをりて見わた  
さるれば、いてたまふて

源

たなはたのあふせは雲のよそにみてわかれのにはに露  
そをきそふ

御てうつなとまいらする中將のきみのあふきに

中將君

きみこふるなみたはきはもなき物をけふをはなにの  
てといふらん

とかきつけたるをとりて見たまふて(一一二オ)

源

人こふるわか身もすゑになりゆけとのこりおほかるな  
みたなりけり

とかきそへ給、九月になりて九日わたおほひたるきくを御  
覧して

同

もろ共におきゐしきくのあさ露もひとりたもとにかゝ  
る秋かな

雲井をわたるかりのつはさもうらやましくまもられ給

源

おほそらをかよふまほろしゆめにたにみえこぬたまの  
ゆくゑたつねよ

いにしへあやしかりし日かけのをり、さすかにおほしいて  
らるへし

源

宮人はとよのあかりにいそくけふ(一一二ウ)ひか  
けもしらてくらしつるかな

人わろく成ぬへければえよくも見給はて、こまやかにかき  
給つるかたはらに

源

かきつめてみるもかひなしもしほくさおなし雲井のけ  
ふりとをなれ

まことやたうしのさかつきのつゐてにかゝる事ありき

源

はるまでのいのちもしらす雪のうちに色つくむめをけ  
ふかさしてん

御かへり

導師

千代の春みるへき花といのりをきてわか身そ雪とともに  
にふりぬる

わか宮の、なやはんにおとたかゝるへき事なにわさをせ  
ん、とは(一一三オ)しりありき給も、おかしき御有さ  
まを見さらん事とよろつにしのひかたし

源

ものおもふと過る月日もしらぬまにとしも我身もけふ  
やつきぬる

にほふ宮

くいたいしのわか身にとひけるさとりをもえてしかなとそ



ひとりこたれたまひける

薫 おほつかなたれにとはましいかにしてはしめもはても  
しらぬわか身そ

こうはい

さかしきひしりの有けるを、やみにまとふはるけところに  
(一一三ウ)「きこえをかせんかし、とて

紅梅 こゝろありてかせのにははすそのゝむめにまつ鶯のと  
はすやあるへき

しひてまめたちたまはんもみところすくなくやあらまし、  
なとしりうこちてけふもまいらせたまふに、又

紅梅 もとつかのにはへるきみかそてふれははなもえならぬ  
をやちらさん

まことにいひなかさんとおもふところあるにやと、さすか  
に御こゝろときめきし給て

にはふ宮 花のかをにははすやとにとめゆかは(一一四オ)「い  
ろにめつとや人のとかめん

竹川

ことすくなに心もとなきほとなるをねたかりて、宰相のき  
みときこゆる上らうのよみかけたまへる

宰相君 おりてみはいとゝにはひもまさるやとすこしいろめけ

むめのはつはな

くちはやしときゝて

薫 よそにてはもきゝなりとやさたむらんしたにほゝえむ  
梅のしつえを

少将は、この源侍従の君のかくほのめきよるめれはみな人  
かれに(一一四ウ)「こそ心よせ給ふらめ、我が身はいとゝ  
くんしいたく思よりはりて、あちきなくそうらむる

源宰相中将 人はみなはなにこゝろをうつすらんひとりそまよふは  
るの夜のやみ

うちなけきてたては、うちの人かへし

おりからやあはれもしらむ梅の花たゝかはかりにうつ  
りしもせし

あしたに四ゐの侍従のもとよりあるしの侍従のもとに、よ  
へはいとみたりかはしかりしを人ゝいかにみ給けん、とみ  
たまへとおほしうかなかちにかきて、はしに(一一五オ)「

竹川在大和 たけかはのはしよりいてしひとふしにふかきこゝろの  
そこはしりきや

御返事いとわかくかく、よへはみつむまやをなん人ゝとか  
めきこゆめりし

頭中将 たけかはによをふかさしといそきしもいかなるふしに  
思をかまし

みたれおつるさまのいとくちおしくあるはたゝしければ、  
(ママ)

まけかたのひめ君

冷泉院女御

さくらゆへかせにこゝろのさはくかな思くさなきはな

とみるく

御かたの宰相君

宰相君

さくと見てかつはちりぬる花なれは（一一五ウ）ま  
くるにふかきうらみしもせず

ときこえたすくれば、右のひめきみ

尚侍

かせにちるはなはよのつねえたなからうつろふ色をたゝ  
にしもみす

この御かたの大夫君

玉かつら女房

こゝろありていけのみきはにおつるはなあはとなりて  
もわかかたによれ

かちかたのわらはへおりてはなのしたにありきて、ちりた  
るをいとおほくもてまいれり

女房無名

おほそらのかせにちれともさくらはな（一一六オ）  
をのか物とそかきつめてみる

左のなれき

馴公

さくらはなにほひあまたにちらさしとおほふはかりの  
そてはありやは

いたうもかくさす、そこはかとなくだゝよをうらめしけに  
かすめたり

薫

つれなくてすぐる月日をかそへつゝものうらめしきく  
れのはるかな

めくはせ奉らましかはこよなからましものをなといひて

源宰相中将

いてやなそかすならぬ身にかなはぬは人にまけしのこゝ  
ろなりけり

中将よりわらひて（一一六ウ）

中将御許

わりなしやつよきによらんかちまけをこゝろひとつに  
いかゝまかする

といらふるさへそつらかりける

源宰相中将

あはれとててをゆるせかしいきしにをきみにまかする  
わか身とならは

さりとまたかへたまはさらましなどの給、さてれいの

源宰相中将

はな見てもはるはくらしつけふよりやしけきなけきの  
したにまとはん

ゆくすゑのはへくしからぬをおほしたり、おりしもこの  
御ふみとりいれてあはれかる、御返事（一一七オ）

中将御許

けふそしるそらをなかわるけしきにてこゝろははなに  
うつりけりとも

あやしきにも、かきりとあるをまことにやおほして、やか  
てこの御文のはしに

冷泉院女御

あはれてふつねならぬよのひとつもいかなる人にか  
くるものそは

いとゝ涙もとゝまらず、たちかへりたかなはたゝしなとか  
ことかましくて

いけるよのしにはこゝろにまかせねはきかてややま  
なきみかひとこと

まほにはあらねとよのなかうらめしけにかすめつゝかたら  
ふ

<sup>薫</sup>てにかゝるものにしあらはふちのはな（一一七ウ）  
まつよりこゆるいろを見ましや

とて花をみあけたるけしきなどあやしくあはれに心くるし  
くおほゆれは、我心にもあらぬよのありさまをほのめかす  
<sup>頭中將</sup>むらさきのいろはかよへと藤のはなこゝろにえこそかゝ  
らさりけれ

月はえはいますこし心ことなりとさためきこえし、なとす  
かして、うちより

<sup>女房</sup>たけかはのそのよのことは思いつやしのふはかりのふ  
しはなけれど

といふ、はかなき事なれとなみたくまるゝもけにいとあさ  
くはあらぬ事なり、とみつからも思しらる（一一八オ）  
<sup>薫</sup>

なかれてのたのみむなしきたけかはによはうきものと  
おもひしりにき

はしひめ

君たちに御ことゝもをしへ奉り給、いとおかしけにちいさ  
き御ほとゝくに、とりゝかきならし給ふものゝねともあ

はれにをかしきこゆれは、なみたをうけたまひて

<sup>優婆塞</sup>うちすてゝつかいさりにし水とりのかりのこのよにた  
ちをくれけむ

すゝりにはかきつけさなりとてかみ奉り給へれば、うちは  
ちしらひてかきたまふ（一一八ウ）

<sup>大君</sup>いかにしてすたちけるそとおもふにもうき水鳥のちき  
りをそしる

わか君とかい給へとの給へは、いますこしおさなけにひさ  
しくかきいてたまへり

<sup>中君</sup>なくゝもはねうちかはす君なくはわれそすもりにな  
るへかりける

<sup>マコ</sup>むかしの人もし給ましかはと、思出聞え給はぬおりなかり  
けり

<sup>優</sup>見し人もやともけふりになりにしをなにとてわか身き  
えのこりけん

あはれなる御すまゐるを人つてにきく事、なときこえ給て  
（一一九オ）

<sup>冷</sup>世をいとふこゝろは山にかよへともやへたつくもをき  
みやへたつる

めつらしくとまちよろこひて、ところにつけたるさかなな  
としてさるかたにもてはやしたまふ

<sup>優婆塞</sup>あとたえてこゝろすむとはなけれどもよをうち山にや

とをこそかれ

人やりならすいたくぬれ給ぬ、かゝるありきなとも、おさくならひ給はぬこゝちに、こゝろほそくおかしうおほえたまふ

<sup>薫</sup>山おろしにたえぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわかなみたかな（一一九ウ）

なに事をおほしのこすらん、かくつゝましけにおくまり給へるもことはりそかし、などおほゆ

<sup>薫</sup>あさほらけいへちもみえすたつねこしまきのをやまはきりこめてけり

御返きこえたへにくけなれば、れいのつゝましけにて<sup>大君</sup>雲のあるみねのかけちを秋きりのいとゝへたつるころにもあるかな

われはうかはすたまのうてなにしつけき身と思へきかは、など思つゝ

<sup>薫</sup>はしひめの心をくみてたかせさすさほのしづくにそてそぬれける（一二〇オ）

もてまいる御返かみのかなとおほろけならんははつかしけなるを、ときこそはかゝるをりはとて

<sup>大君</sup>さしかへるうちのかはをさ朝夕にしつくやそてをくたしはつらん

みちのくにかみに五六まいにつふくとあやしきとりのあ

とのやうにて

<sup>柏</sup>めのまへにこのよをそむくきみよりもよそにわかるゝたもとかなしき

またはしに、めつらしうきゝ侍ふたはのほともうしろめたくおもふ給ふるかたはなけれども

<sup>同</sup>いのちあらはそれとも見まし人しれす（一二〇ウ）  
いはねにとめし松のおいすゑ

しゐかもと

ひとりこきいて給はんふなわたりのほとまろらかにやとおもひやすらひたまふほとに、かれよりも御ふみあり

<sup>優婆塞</sup>山風にかすみふきとくこゑはあれとへたてゝ見ゆるをちのしらなみ

さうにいとおかしうかき給へり、宮、おほすあたりのとみたまへはいとおかしうおほして、この御返はわれせむとて<sup>にほふ</sup>をちこちのみきはに波はへたつともなをふきかよへうちの河かせ（一二一オ）

御ともにさふらふうへわらはのおかしきしてたてまつりたまふ

<sup>にほふ</sup>山さくらにはふあたりにたつねきておなしかさしをおりてけるかな

なかゝにきく事になんし侍しなとふる人ともきこゆれば、

中君にそかゝせたてまつられたまふ

中君 かさしなる花のたよりも山かつのかきねをすきぬ春の  
たひ人

ゆつりきこえてんとてみやは佛の御まへにまいり給ぬ

優婆塞

我なくて草のいほりはあれぬともこのひとはかれ  
しとそおもふ（一二二ウ）

かゝるたいめもこのたひやかきりならんと物心ほそきにし  
のひかねて、かたくなしきひかことゝもおほくもなりぬる  
かな、とてうちなきたまふ、まろうと

薫

いかならん世にかかれせむなきよのちきりむすへる  
草のいほりは

なみたもひるまもやとおほしやりていとおほくかきつゝけ  
給へり、しくれかちなるゆふつかた

句

をしかなく秋の山さといかならんこはきか露のかゝる  
ゆふくれ

われさかしう思しつめ給にはあらねと、みわつらひ給て

（一二二オ）

大君

涙のみきりふたかれる山さとはまかきにしかそもろこ  
ゑになく

おまへなる人くさゝめききこえてにくみきこゆ、ねふた  
ければなめり、またあさきりふかきあしたにいそきおきて  
奉り給

句  
あさきりにともまとはせるしかのねを大かたにやはあ  
はれともきく

いとこころくるしけなるに、ましておはすらんさまほのみ  
しあけくれなとおもひいてられて

薫

色かはるあさちを見てもすみそめにやつるゝ袖をおも  
ひこそやれ（一二二ウ）

ひとりことのやうにのたまへは

大君

いろかはるそてをは露のやとりにて我身そさらにをき  
ところなき

いとむねいたうおほしつゝけゝる、いたくくれ侍ぬと申せ  
は、なかめさしてたち給に、かりなきてわたる

薫

秋きりのはれぬくもゐにいとゝしくこのよをかりとい  
ひしらすらん

あひ見たてまつることたえてやまゝしやは、なとかたらひ  
給

大君

君なくていはのかけみちたえしより松の雪をもなにと  
かは見る

なかの君（一二三オ）

中君

おく山のまつ葉にとまる雪とたにきえにし人をおもは  
ましかは

いかにはつかしうむねつふれましと思に、こたへやり給は  
す

大君  
雪ふかき山のかけはし君ならて又ふみかよふあとをみ  
なかな

とかきてさし出給へれば、御物あらかひこそ中／＼心を  
れ侍ぬへけれとて

薫  
つららとちこまふみしたく山川をしるへしかてらまつ  
やわたらん

(ママ)  
御ゆかなととりやはてかきはらひたり、ほいもとけはとち  
きりきこえし事おほしいて、(一二三ウ)

薫  
たちよらむかけとたのみししゐかもとむなしき床にな  
りにけるかな

ゆきかふ月日のしるしもみゆるこそおかしけれなと人／＼  
のいふを、なにのおかしきならむときゝたまふ

大君  
君かおるみねのわらひと見ましかはしられやせましは  
るのしるしも

中君  
雪ふかき汀のせりもたかためにつみかはやさんおやな  
しにして

大かたのあはれをくち／＼きこゆるに、いとゆかしうおほ  
されけり

句宮  
つてに見しやとのさくらをこの春は(一二四オ)「か  
すみへたてすおりてかさゝむ

いとつれ／＼なるほとに、見ところ有御文のうはへはかり  
をもてけたしとて

中宮  
いつくとかたつねておらんすみそめにかすみこめたる  
やとのさくらを

あけまき

佛くやうせらるへき心はへなとかきいて給へる硯のついて  
に、まらうと

あけまきになかききりをむすひこめおなし／＼ろに  
よりもあはなん

とかきてみせ奉り給へれば、れいのとうるさけれと

ぬきもあへすもろきなみたのたまのをと(一二四ウ)「  
なかきちきりもいかゝむすはん

にはとりもいつかたにかあらんほのかにおとなふに、けふ  
おもひいてらる

山さとのあはれしらるゝこゑ／＼にとりあつめたるあ  
さほらけかな

女君

とりのねもきこえぬ山と思しをよのうき事はたつねき  
にけり

秋のけしきもしらすかほにあをき枝のかたえいともみちた  
るを

おなしえをわきてそめける山ひめにいつれかふかきい  
ろとはゝや

さすかにかきにくゝおもひみたれたまふ（一二五オ）

山ひめのそむるこゝろはわかねともうつろふかたやふ  
かきなるらん

宮、このころのほとにかならずおくらかし給な、とかたら  
ひたまふを、なをわつらはしかれは

をみなへしさけるおほ野をふせきつゝ心せはくやしめ  
をゆふらん

とたはふれたまふ

きりふかきあしたのはらのをみなへしこゝろをよせて  
見る人そみる

いて給へきけしきもなきよと心やましく、こはつくり給ふ  
もけにあやしきわさなり（一二五ウ）

しるへせし我やかへりてまとふへきこゝろもゆかぬあ  
けくれのみち

かゝるためしよにありけんやとのたまへは

かた／＼にくらすこゝろをおもひやれひとやりならぬ  
みちにまとはゝ

さらにおきあかり給はねは、いとさひしくなりぬと御つか  
ひわひけり

よのつねに思ひやすらん露ふかみみちのさゝはらわけ  
てきつるも

御れうとおほしきふたたりいときよらにしたるを、ひと

への御そのそてに、こたいの事なれと（一二六オ）

さよころもきてなれにきといはすともかことはかりは  
かけすしもあらし

御つかいかたへはにけかくれにけり、あやしきしも人をひ  
かへてそ御返たまふ

へたてなき心はかりはかよへともなれし袖とはかけし  
とそおもふ

はしたなからぬほとにいと心あはたゝしけにて、こゝろ  
よりほかならんよかれを返ゝのたまふ

なかたえんものならなくにはしひめのかたくし袖やよ  
はにぬらさん（一二六ウ）

いてかてにたちかへりつゝやすらひたまふ

たえせしの我たのみにやうちはしのはるけき中をまち  
わたるへき

さうの事上すにて故宮のあけくれあそひならはし給ければ、  
なとくち／＼いふ、さい相中將

いつそやも花のさかりにひとめ見しこのもとさへや秋  
はさひしき

あるしかくと思ていへは、中納言

さくらこそおもひしらすれさきにほふはなももみちも  
つねならぬよを（一二七オ）

ゑもんの督

いつこより秋はゆきけん山さとのもみちのかけはすき  
うき物を

宮のたいふ

見し人もなき山さとのいはかきにこゝろなかくもはへ  
るくすかな

なかにおいしらひてうちなき給、みこのわかくをはしける  
よの事なとおもひいつるなめり、宮

秋はてゝさひしさまさるこのもとをふきなすこしそみ  
ねの松かせ

すこし物へたてたる人と思きこえましかはとおほすに、し  
のひかたくて

わか草のねみんものとはおもはねと（一二七ウ）む  
すほゝれたるこゝちこそすれ

たかためおしきいのちにかとおほとなふらまいらせて見  
たまふ、れいのこまやかにかきたまふて

なかむるはおなし雲ゐをいかなれはおほつかなさこそ  
ふるしくれそ

かれこれそゝのかしきこゆれはたゝひとことなん

あられふるみ山のさとはあさゆふになかむる空はかき  
くらしつゝ

おもくしきみちにはおこなはぬ身なれとたうとくこそ侍  
けれとて

霜さゆるみきはのちとりうちわひて（一二八オ）な  
くねかなしきあさはらけかな

ことはのやうにきこえ給、つれなき人の御けはひにもかよ  
ひて思よそへらるれと、いらへにくゝて、弁してそきこえ  
給

あか月のしもうちはらひなく千鳥物おもふ人のこゝろ  
をやしる

思つる事ともかたらはやと思ひつゝけてなかめ給、ひかり  
もなくてくれはてぬ

かきくもりひかりもみえぬおく山にこゝろをくらすこ  
ろにもあるかな

御そのいろはかはらぬを、かの御かたの心よせわきたりし  
人くゝのいとくろうきかへたるをほの見給ひて（一二八ウ）  
くれなゐにおつるなみたのかひなきはかたみのいろを  
そめぬなりけり

むかひのてらのかねのこゑまくらをそはたてゝ、けふもく  
れぬとかすかなるひゝきをきゝて

をくれしと空行月をしたふかなつゐにすむへきこのよ  
ならねは

もろ共にきこえましとおもひつゝくるそ、むねよりあまる  
心ちする

こひわひてしぬるくすりのゆかしきに雪の山とやあと  
（ママ）



をけなまし

ひとかたにもえうとみはつましかりけり、つくくときゝ  
給て（一二九才）

きしかたをおもひいつるはなかなきをゆくすゑかけて  
なにたのむらん

とほのかにのたまふ、なか／＼いふせうころもとなし  
ゆくすゑもみしかきものとおもひなはめのまへにたに  
そむかさらなん

さわらひ

うたはわさとかましくひきはなちてそかきたる

阿闍梨 君にとてあまたのはるをつみしかはつねをわすれぬは  
つわらひなり

こよなくめとまりてなみたもこほるれば、かへりことかゝ  
せ給（一二九ウ）

中君 このはるはたれにかみせんなき人のかたみにつめるみ

ねのさはらひ

にはひのいとえんにめてたきをおりおかしうえんにおほさ  
れて

見る人のこゝろにかよふ花なれやいろにはいてすした  
ににはへる

との給へは

薫 みる人にかことよせけるはなのえをこゝろしてこそお  
るへかりけれ

中納言殿より御くるまこせんの人々はかしなと奉れ給へり  
薫 はかなしやかすみのころもたちしまに花のひもとくお  
りもきにけり（一三〇才）

心とゝめてもてあそひ給ひしものをなと心にあまりたまへ  
は

中君 見る人もあらしにまよふやまさとにむかしおほゆるは  
なのかそする

いふともなくほのかにてたえ／＼に聞えたるを、なつかし  
けにうちすしなして

薫 袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねこめうつろふやと  
やことなる

くちおしからすゆへありける人のなこりと見えたり

弁尼 さきにたつなみたの川に身をなけは人にをくれぬいの  
ちならまし

すへてなへてむなしく思ひとるへき世になん、などのたま  
ふ（一三〇ウ）

薫 身をなけんなみたのかはにしつみてもこひしきせゝは  
わすれしもせし

おひゆるめるかたちもしらすつくろひさまよふに、いよ  
／＼やつして

弁尼

人はみないそきたつめるそてのうらにひとりもしほを  
たるゝあまかな

とうれへきこゆれば

中君

しほたるゝあまのころもにことなれやうきたる浪にぬ  
るゝわかそて

御くるまにのるたいにのきみといふ人のいふ

太式君

ありふれはうれしきせにもあひけるを（一二三才）

身をうち川になけてましかは

こよなうもあるかなとこゝろつきなふ見たまふ、いまひと  
り

女房無名

すきにしかこひしきこともわすれねとけふはたまつも  
行こゝろかな

七日の月のさやかにさしいてたるかけおかしくかすみたる  
をみ給ひつゝ、いととをきにならはすくるしければ、うち  
なかめられて

中君

なかむれはやまよりいてゝ行月も世にすみわひて山に  
こそいれ

むねうちつふれて、物にもかなやとかへすゝひとりこた  
れて

薫

しなてるやにはのみつうみにこく舟の（一二三才）  
まほならねともあひ見しものを

やとりき

まつけふはこの花一えたゆるすとの給はすれば、御いらへ  
きこえさせて、おりておもしろきえたををりてまいりたま  
へり

よのつねのかきねにほふ花ならは心のまゝにおりて  
見ましを

とそうし給へるよういあさからすみゆ

しもにあえすかれにしそのゝきくなれとのこりのいろ  
はあせにもあるかな

（ママ）

をのつからをかしくそみえ給ける、あさかほをひきよせ給、  
露いたくこほる（一二三才）

けさのまの色にやめてんをく露のきえぬにかゝるはな  
と見るゝ

露をおとさすも給へりけるよとをかしくみゆるに、をきな  
からかゝるけしきなれば

きえぬまにかれぬる花のはかなさをくるゝ露はなを  
そまされる

こよひすきぬも人わらへなるへければ、御子の頭中将して  
聞え給へり

おほそらの月たにやとる我やとにまつよひすきてみえ  
ぬ君かな

なつかしくめやすき御すまゐなれとこよひはさもおほえす、

(二三二ウ)「しめのはのをとにはおとりておもほゆる

山さとのまつのかけにもかくはかり身にしむ秋のかせ  
はなかりき

うしろめたのわさや、さかしらはかたはらいたさにそゝの  
かし侍れと、いとなやましけにてなん

をみなへししほれそまさるあさ露のいかにをきけるな  
こりなるらん

心もあくかれてなめふし給へり、またいとふかきあした  
に御ふみあり、れいのうはへはけさやかなるたてふみにて  
いたつらにわけつる道のつゆしけみ(二三三オ)「む  
かしおほゆる秋の空かな

いとをしけに聞え給へと、ともかくもいらへ給はぬさへい  
とねたくて

また人になれける袖のうつりかを我か身にしめてうら  
みつるかな

女は、あさましくの給つゝくるにいふへきかたもなきを、  
いかゝはとて

見なれぬるなかのころもとたのみしをかはかりにてや  
かけはなれなん

みやま木にやとりたるつたの色そまたのこりたる、えたな  
とすこしひきとらせ給て、宮へとおほしくてもたせ給

やとり木とおもひいてすはこのもとの(二三三ウ)「

たひねもいかにさひしからまし

とひとりこちたまふをきゝて、あま君

あれはつるくち木のもとをやとり木とおもひをきける  
ほとのかなしき

れいの事なれとゆふかせなをあはれなるころなりかし

ほにいてぬ物おもふらししのすゝきまねくたもとの露  
しけくして

ちいさき御きちやうのつまより、けうそくによりかゝりて  
ほのかにさしいて給へる、いとみまほしうらうたけなり

秋はつる野へのけしきもしのすゝき(二三四オ)「ほ  
のめく風につけてこそしれ

これは大将のきみのおりて御かさしおりてまいり給へりけ  
るとか

すへらきのかさしにおるとふちのはなおよはぬえたに  
そてかけてけり

うけはりたるそにくきや

よろつよをかけてにははん花なれはけふをもあかぬい  
ろとこそ見れ

又たれとか

きみかためおれるかさしはむらさきの雲にとらぬは  
なのけしきか

よのつねの色ともみえすくもゐまで(二三四ウ)「た

ちのほりたるふちなみのはな

うちわらひて、さらはしかつたへ侍らんとてゐるに

かほとりのこゑもきゝしにかよふやとしけみをわけて  
けふそたつぬる

あつまや

この御のかれことはこそ思いつれはゆゝし、との給ても又  
涙くみ給

見し人のかたしろならば身にそへて恋しきせゝのなて  
ものにせん

なとたはふれにいひなしてまきはし給

<sup>中君</sup>みそき川せゝにいたさんなて物を（二三五才）身に  
そふかけとたれたのめけん

なに事いひゐたるなとつふやかると、心ちなけるさま  
はさすがにしたらねは、いかゝいふところみに

<sup>浮舟母</sup>しめゆひしこはきかうへもまよはぬにいかなる露にう  
つるしたはそ

とあるにいとおしくおほえて

<sup>聲</sup>みやき野のこはきかもとゝしらませは露も心もわかす  
そあらまし

いかにつれ／＼にみならひ給はぬ心ちし給らん、しはし忍  
すくし給へ、とある返事に、つれ／＼はなにか心やすくな

ん（二三五ウ）

<sup>浮舟</sup>ひたふるにうれしからまし世中にあらぬところとおも  
はましかは

とおさなけにいひたるをみるまゝにほろ／＼とうちなきて、  
けにかくまとはしはふるゝやうにもてなすことゝ、いみし  
ければ

<sup>母</sup>うき世にはあらぬところをもとめても君かさかりを見  
るよしもかな

やり水のほとりなる岩にゐ給てとみにもたゝす

<sup>薫</sup>たえはてぬし水になとかなき人の面影をなにとゝめさ  
りけん

さのゝわたりにいへもあらなくなとくちすさみて、さと  
ひたる（一三六才）すのこのはしつかたにゐ給へり

<sup>薫</sup>さしとむるむくらやしけきあつまやのあまちはとふる  
あまそゝきかな

なをしの花のおとろ／＼しううつりたるを、おとしかけの  
たかきところにてみつけて、ひきいたたまふて

<sup>薫</sup>かたみそとみるにつけても朝露の所せきまでぬるゝ袖  
かな

めとゝめ給ほとに、くたものいそきにそみえける

<sup>井</sup>やとり木は色かはりぬる秋なれとむかしおほえてすめ  
る月かな（一三六ウ）

とふるめかしくかきたるを、はつかしくもあはれにもおほ  
されて

<sup>薫</sup>さとの名もむかしなからに見し人のおもかはりせるね  
やの月かけ

うきふね

つねにかくてあらはやとのたまふにも、なみたはおちぬ  
<sup>句</sup>なかきよをたのめてもなをかなしきはたゝあすしらぬ

命なりけり

中く／＼<sup>たつね</sup>尋いてけんとの給、女ぬらしたまへるふてを  
とりて

<sup>浮舟</sup>心をはなけかさらましいのちのみさためなき世とおも  
はましかは（一三七オ）

つまにもろ共におはしてやり給はす

<sup>句</sup>世にしらすまとふへきかなさきにたつ涙もみちもかき  
くらしつゝ

女もかきりなくあはれと思へり

<sup>浮舟</sup>なみたをもほとなき袖にせきかねていかにわかれをとゝ  
むへき身そ

女はかきあつめたるこゝろのうちにもよほさるゝなみたと  
もすれはいてたつを、なくさめかねたまひて

<sup>薫</sup>うちはしのなかききりもたえせしをあやふむかたに

こゝろさはくな（一三七ウ）

いまは見給ひてんとの給ふに

<sup>浮舟</sup>たえまのみよにはあやうきうちはしをくちせぬものと  
なをたのめとや

いとはかなけれとなとせもふへきみとりのふかさを、との  
たまひて

<sup>句</sup>としふともかはらんものかたちはなのこしまかさきに  
ちきるこゝろは

女もめつらしからん道の様におほえて

<sup>浮</sup>たちはなのこしまか色はかはらしをこのうきふねそゆ  
くゑしられぬ

よへわけこしみちのわりなさなど、あはれおほくそへてか  
たり給ふ（一三八オ）

<sup>句</sup>みねの雪みきはのこほりふみわけて君にそまとふみち  
はまとはす

とかきてみせ給へは

<sup>浮</sup>ふりつみてみきはにこほる雪よりもなか空にてそわれ  
はけぬへき

おやのかうこは所せきものにこそとおほすもかたしけなし、  
つきせぬことゝもかきたまふて

<sup>句</sup>なかめやるそなたの雲もみえぬまで空さへくるゝころ  
わひしさ

思さまならめをろかなるにやは、などはしかに

<sup>薫</sup>水まさるをちのさと人いかならん（二三八ウ）はれ

ぬなかめにかきくらすころ

けふはえきこえしとはちしらひて、手ならひに

<sup>浮</sup>さとの名を我身にしれは山しろのうちのわたりそいとゝ

すみうき

とさまかうさまに思なせと、ほかにたえこもりてやみなん、

いとあはれとおほゆへし

<sup>同上句へ返</sup>かきくらしはれせぬみねのあま雲にうきて世をふる身

をもなさはや

のとかにみ給つゝ、あはれいかななむらんといとこひし

<sup>同上薫へ返</sup>つれくゝと身をしる雨のをやまねは（二三九オ）袖

さへいとゝみかさまりて

御つかひのれいよりもしけきにつけてもおもふ事さまくゝ

なり、たゝかくそのたまへる

<sup>薫</sup>なみこゆるころともしらてすゑの松まつらんとのみお

もひけるかな

心あはたゝしければかへりたまふほといへはさらなり

いつこにか身をはすてんとしら雲のかゝらぬ山となく

くそゆく

人わらへならんなどをきかれ奉らんよりはとおもひつゝけ  
て

<sup>浮</sup>なけきわひ身をはすつともなきかけに（二三九ウ）

うきななかさんことをこそおもへ

宮はいみしきことゝものたまへり、いまさらに人やみんと

思へは、この御返事をたにおもふまゝにもえかゝす

<sup>浮</sup>からをたにうきよのなかにとゝめすはいつくをはかと

君もうらみん

寺へ人やりたるほと返事かく、いはまほしき事はおほかれ

とつゝましくて

<sup>浮</sup>のちにまたあひみんことをおもはんこのよのやみに

こゝろまとはて

す行のかねのをと風につきてきこえるをつくゝときゝ

ふし給へり

<sup>同</sup>かねのをとのたゆるひゝきにねをそへて（一四〇オ）

我よつきぬと君につたへよ

かけろふ

こゝにわたり給ときゝ給日なりければ、橘をもらせ給て聞

え給

<sup>薫</sup>忍ねやきみも鳴らんはかもなきしてのたをさにこゝろ

かよはし

女君の御さまのいとよくにたるをいみしうあはれにおもほ  
しつゝふたりなかめ給おりなりけり、気色あるふみかなと

み給て

句

たち花のかほるあたりに郭公心(ママ)ちしてこそなくへかり  
けれ

いまはこゝをきてみむ心うかるへしとみめくらしたまふ

(一四〇ウ)

薫

我も又うき故郷にあればはたれやとり木のかけをし  
のはん

かく物おほいたる様もみしりければ、しのひあまりてきこ  
えたり

小宰相君

あはれしるこゝろは人にをくれねとかすならぬ身にき  
えつゝそふる

しめやかなる程をいとよくをしはかりていひたるもにくか  
らす

薫

つねなしとこゝら世をみるうき身たに人のしるまてな  
けきやはする

しかはかりおほしなひく人のあらましかは、とおもふそく  
ちおしき

薫

萩の葉に露ふきむすふ秋風も(一四一オ)「ゆふへそ  
わきて身にはしみける

うちみしろきなともせずのとやかなる物から、いとく

中将君

花といふ名こそあたなれをみなへしなへての露にみた  
れやはする

弁のおもとは、いとけさやかなるおきなことにく侍り、  
とて

弁君

たひねしてなをこゝろ見よをみなへしさかりの色にう  
つりうつらす

さて後さためきこえんといへは

薫

やとかさは一夜はねなん大かたの花にうつらぬこゝろ  
なりとも(一四一ウ)

夕くれかけろふの物はかなけにとひかふを

薫

ありと見て手にはとられすみれは又ゆくゑもしらすき  
えしかけろふ

てならひ

おりくにつけては思いつ、なをあさまじう物はかなかり  
けるとわれなからくちおしければ、てならひに

浮舟

身をなけし涙の川のはやきせをしからみかけてたれか  
とゝめし

さまくの物語りするに、いらふへきかたもなければ、つ  
くくとうちなかめて

同

われかくてうき世の中にめくるとも(一四二オ)「た  
れかはしらん月のみやこに

いかなるすちに世をうらみ給人にか、なくさめきこえはや、  
なとゆかしけにのたまふ、いてたまふとてたうかみに

中將  
あたしのゝ風になひくをみなへしわれしめゆはん里  
とをくとも

尼君、聞えさせつる様によつかす人にぬ人にてなん

尼公

うつしうへて思みたれぬ女郎花うきよをそむく草のい

ほりに

いつら、あな心う、あきとちきれるはすかい給にこそあめ  
れ、なとうらみて

中將

まつむしのこゑをたつねてきつれとも（一四二ウ）

みを荻はらの露にまとひぬ

あま君、はやうはいまめきたる人にそ有ける、なこりなる

へし

尼公

秋の野の露わけきたるかり衣むくらしけれやとにか

こつな

おくふかなるけはひも所のさまににすすさましと思へは、

かへりなんとするに、ふえのねさへいとゝあかすおほえて

尼君

ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のはちかきやとに

とまらぬ

となまかたはなることを、かくなんきこえ給といふに、心  
ときめきして

中將

山のはに在るまで月をなかめみん（一四三オ）むね

（ママ）

のいくまもしるしありやと

きこえくるふえのねいとをかし、つとめてとく、よへは中

く心みたれ侍しかは、いそきまかてはへりし

中將

わすられぬむかしのこともふえたけのつらきふしにも

ねそなけれける

なにかはとあるを、いとゝわひたれば、なみたもろにてと  
かき給ふ

尼君

ふえのねにむかしのこともわすられてかへりしほとも

袖そぬれにし

いとつゝましくなんとの給、ものをちはさもし給つへき人

そかしとおもひて、しひてもいさなはず（一四三ウ）

浮舟

はかなくてよにふるかはのうきせにはたつねもゆかし

ふたもとのすき

たはふれことをいひあて給へるに、むねつふれておもてあ

かみ給へるも、いとあひきやうつきてうつくしけなり

尼君

ふるかはのすきのもとたちしらねともすきにし人によ

そへてそみる

夕くれのかせのをともあはれなるに、思いつる事ともおほ

くて

浮舟

こゝろには秋のゆふへをわかねともなかもるそらに露

そみたるゝ

たゝけちかくてきこえん事をきゝにくしともおほしことは

（一四四オ）れと、よろついひわひて

中將

山さとの秋のよふかきあはれをもものおもふ人はおも



ひこそしれ

まきはしきこゆへき人も侍らす、いとよつかぬ様ならん、  
とせむれば、

<sup>浮舟</sup>うきものとおもひもしらてすくる身をものおもふ人と  
ひとはしりけり

思あまるおりは、てならひをのみたけき事にてかきつゝけ  
給

<sup>浮舟</sup>なきものに身をも人をも思つゝすてつる身をそさらに  
すてつる

今はかくてかきりつるそかしかきても、なをみつからい  
とあはれにみ給ふ（一四四ウ）

<sup>同</sup>かきりそと思なりにし世中をかへすゝもそむきつる  
かな

さるへからんおりといひし物をとくちおし、たちかへり、  
きこえんかたなきは

<sup>中将</sup>きしとをくこきはなるらんあまふねにのりをくれしと  
いそかるゝかな

いまはとおもふもさはやかなる物から、いかゝおほさるら  
ん、いとはかなきものゝはに

<sup>浮舟</sup>こゝろこそうき世のなかをはなるれとゆくゑもしらぬ  
あまのうきゝを

たひねもしつへき木のもとにこそとて見いたしたまへり、

あま君れいのなみたもろにて（一四五オ）

こからしのふきにし山のふもとにはたちかくるへきか  
けたにそなき

とのたまへは

<sup>中将</sup>まつ人もあらしとおもふやまさとのこすゑをみつゝな  
をそすきうき

心むけもさのみ見え侍をなとかたらふ、こなたにもせうそ  
こし給へり

<sup>中将</sup>おほかたのよをそむきけん君なれはいとふにやとて身  
こそつらけれ

心うしと思はてにたれと、猶そのおりのことはわすられす  
<sup>浮舟</sup>かきくらす野山の雪をなかくてもふりにしことそけふ

はかなしき（一四五ウ）

わかなをおろそかなるこにいれて人のもてきたりけるを、  
尼君みて

山さとの雪まのわかなつみはやしなをおひさきのたの  
まるゝかな

とてこなたにたてまつり給へりければ

<sup>浮舟</sup>雪ふかき野辺のわかなもいまよりは君かためにそとし  
をつむへき

けらうのあまのすこしわかきがある、めしいてゝ花おらす  
れば、かことましようちるにいとゝにほひくれは

浮舟(ママ)

袖なれし人こそ見えね花のかのそれかとにほふ春のあ  
けほの(一四六才)

水をのそき給ていみしうなき給き、うへにのほりてはしら  
にかきつけたまふ

見し人はかけもとまらぬ水のうへにおちそふなみたい  
とせきあへす

くれなゐにさくらのをり物のこうちきかさねて、おまへに  
はかゝるをこそたてまつらすへけれ、あさましきすみそめ  
なりや、といふ人あり

あまころもかはれる身にやありしよのかたみのそてを  
かけてしのはん

ゆめのうきはし

いまはいかてあさましかりし世のゆめかたりをたに、とい  
そかるゝ心の、われなからもとかしきになん、まして人め  
はいかに、とかきもやりたまはす

のりの師とたつぬるみちをしるへにておもはぬ山にふ  
みまとふかな